立命館地理学　第5号（1993）　17～29

京　都　の　観　光　要　素

津　川　康　雄*

Ⅰ．はじめに

観光とは古く中国の易経「国之光ヲ観ル」に示されるように、他国を巡回旅行することで他国の実情をみて自国の良否を知り、同時に見聞を広めるものとされてきた。また、観光は気分を爽快にし保養遊覧効果もあわせられるので、時代が進むと、慰安目的を伴った、あるいはそれを主目的にした観光旅行が行なわれるようになってきたと説明されることもある[1]。もちろん、観光は時代背景などによってその内容も変化し、歴史的重層性に支えられて複合的な対象が生み出されていく。

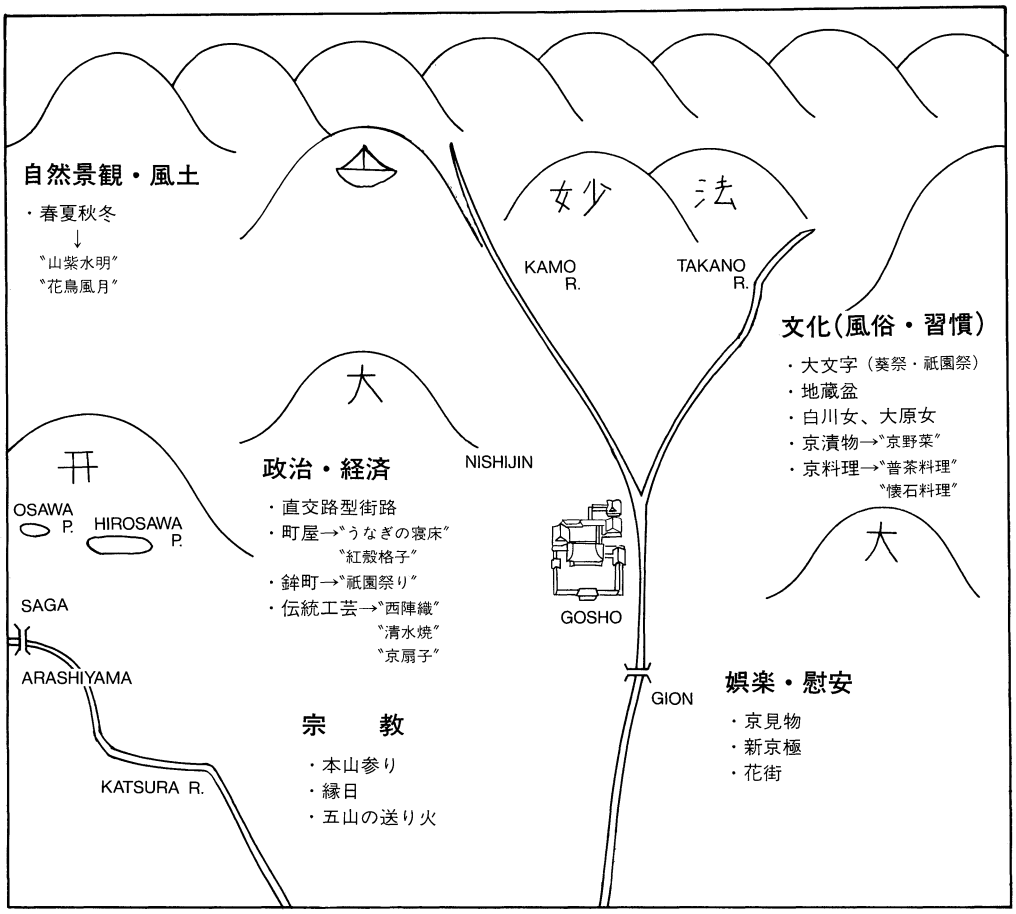
いずれにしても、そこには人々の関心を引き、興味・好奇心等を満たす対象が存在していることが必要となる。言い替えれば、人間の五感を何らかの形で満たす対象が求められ、数多くの観光対象がそれに答えていくことになろう。

では、観光対象はいかなる要素から構成され、時代の流れに伴って形成されるのであろうか。本稿では一例として歴史的観光都市であり、全国の小京都の原点ともなる京都を取り上げ、京都が観光対象化されるきっかけとなった諸要素を分析することにしたい。それは、観光要素が歴史的クロスセクションの中で生み出されかつ統合され、場合によってはランドマーク化されていくことにより景観変化が促されてきたと考えられるからである。抽象的な意味での“京都らしさ”がいかに現出されてきたのかについて具体例を交えてその背景を探ることにしたい。また、近年、京都の伝統や文化が強く伝播したことを前提として観光地化されている各地の“小京都”を理解する上での一助になることも念頭に置いている。さらに、京都の観光・娯楽要素の成り立ちを経年変化の中で位置づける作業も加えてみたい。

* 立命館大学非常勤講師

Ⅱ．近代以前の観光対象と諸要素

京都の自然や風土をあらわす言葉として頼山陽が用いたとされる“山紫水明処”は、我々の心の中にそこはかとない京都へのイメージを飾るのにふさわしい表現である[2]。毎年、京都の風土や文化に接するために数多くの人々が様々な思いを胸に抱いて上洛し、そして、様々な思いを胸に秘めて故郷へと帰っていく様子は、単に観光という枠を越えた京都の魅力への回帰といっても言い過ぎではないであろう。京都市の行なった調査（平成元年）[3]によると、京都訪問の理由として、①気持が京都にひかれた（26.2％）、②季節がら（20.6％）、③ひまがあったから（15.4％）などと続き、四季折々の風情に心ひかれる観



第1図 京都観光の諸要素(近代以前)

光客の姿を垣間みることができる。

では、京都の持つ魅力すなわち観光対象や観光要素はいかに形成されてきたのであろうか。手始めに、京都の観光が諸事業の展開という形で進む近代(明治期)より以前を中心にまとめてみよう。京都が“都”として遷都されてから現在に至るまでに“京都らしさ”は様々な要素が重合し、一体化されることによって形成されてきた。その要素を様々な角度から分析してみたい。

a. 自然景観(風土)

三方を比叡山、東山三十六峰、愛宕山などで囲まれた京都盆地は流入する鴨川などの河川と相まって“山紫水明処”にふさわしい自然の景観を造りだした。盆地性の気候は夏や冬の厳しい暑さや寒さを生じるものの、四季のうつろいを明瞭にし、“春夏秋冬”、“花鳥風月”を愛でる心を育み、人々の生活様式とも呼応しながら独特の京都文化を創出していくこととなった。たとえば、「京都土産(明治28年)」[4]の中に紹介されている名所見立の部分を紹介すると“御室の桜”に始まり、椿・梅・桃・青葉・藤・山吹・松・楓・牡丹・蓮・菊の名所に続き、“嵐峡の鶯”から千鳥

・雲雀・蛍・水鳥の名所へと移り、“衣笠山の雪”から“広沢池の月”で終る。平安時代の王朝文化のはなばなしき頃は“池泉の都”、“遊楽の池”などと呼ばれ、大覚寺の大沢の池などでは月見の宴が催され、さかんに“園遊”が催されたことにも当時の生活が偲ばれる。

また、京都の商工買物案内本「都の魁（さきがけ）」[5]の一部を紹介すると、貸座敷・旅宿（木屋町三条上ル町）の宣伝文句に「（前略）～名高き東山の景色を詠め、又加茂川の清き流れの場処なれハ、風流文雅の大人、実に寄り給ふ。」と記されている。いかに雅やかな風情を旅人が京都に求めていたかが窺い知れる。また、“庭園”が造られる際には、自然の要素を巧みに取り入れたり、借景を利用するなど景観との一体化が計られることも“京都らしさ”を育んだ一つの要素である。

盆地を流れる河川は様々な役割を果たしている。自然景観の一要素として我々の目をなごませてくれるのはもちろん、上賀茂神社の境内を流れる御手洗（みたらし）川は加茂川から取水され参拝客の禊ぎに利用され、白川によってもたらされる白川砂は白味を帯びた色合いが庭園造りに欠かせない。また、盆地を取り巻く山麓から流れる豊富で水質のよい不圧地下水や被圧地下水が“京料理”に欠かすことのできない生麩・湯葉・豆腐といった材料製造に寄与し、“茶の湯”と京の水も密接な関係があると指摘されている[6]。

b．政治・経済

延暦13（794）年桓武天皇によって行なわれた平安遷都に際し、条坊制に基づく都市形成が実施されたことは、京都の都市構造を規定し、町並み形成に多大の影響を与えた。すなわち、右京と左京、直交路型の街路形態がもたらされ、その後、「上がる」・「下がる」といった地名の表記を生み出すことになった。現在、全国に「小京都」と呼ばれる都市が数多く展開している[7]。その大部分の都市が碁盤目状の街路形態や東山・鴨川・祇園などの地名を取り込みながら部分的に京都の模倣を行なうことで都市形成がなされていったという事実は、“京都らしさ”をかもし出す景観的要素の一つとして都市構造が重要な枠組みをもたらしているものと言えよう。また、中世に地口銭と呼ばれる間口の大きさによって課せられる税を軽くするために端を発したとされる表側を狭くし、奥行きを広く取る“うなぎの寝床”や“紅殻格子”などの風情も京都らしい町屋の雰囲気をかもし出すものとして欠かすことができない[8]。

平安時代以降、京都が政治・経済・文化の拠点として諸国との結合関係が強化され諸機関・諸施設・諸産業が成立し立地展開したことも重要な要素である。すなわち、人や物資の集散・結節点として機能したことにより、商・手工業者が生まれ、問屋が成立し、同業者町等が形成された。いわゆる“町衆”と呼ばれる人々が強固な町内組織を築き上げていったことも京都の精神基盤形成に少なからず影響を及ぼしている。彼らの一部は、“鉾町”を形成し、祇園祭りの主役を努めることになる。また、先の「都の魁（さきがけ）」においても、富小路五条上ル町の津田長兵衛は「商人仕入寄宿」を、富小路五条上ル町の中村ちかは「北国筋商人御定宿」を、東洞院錦小路上ル町の湯浅貞は「御仕込向旅籠屋」を、富小路五条上ル町（経営者不明）は「寄宿商、内国通運越中国一円荷物取扱所」を看板に掲

げており、京都が流通拠点として機能していることが理解される。伝統産業の成立も多く認められ、西陣織・清水焼・京扇子・京友禅などが生まれた。言うまでもなく、これらの中から京土産のいくつかが生まれることになった。

c．文化（風俗・習慣）

“京都らしさ”が文化的な要素としてかもし出されてくるのは平安時代であろう。すなわち、唐風様式から優雅な和風様式へと質的な変化がもたらされ、寺院建築も寝殿造りが生まれ、源氏物語や絵巻物が次々に登場し貴族文化の全盛期が到来する。その後、鎌倉時代には国家の中心としての地位は失ったものの、禅宗の寺院など鎌倉文化が京の中に広まった。とくに、禅宗は華道（池坊）や茶道を生み出し、現在に至る裏千家・表千家といった本末制度の基盤が築かれた。それに伴い、懐石料理や普茶料理が誕生し、“京料理”の基本が成立することになった。なかでも、生間流は代々料理を家職として伝え、明治維新後その流儀は途絶したが、式包丁がいまでも継承されている。室町時代は再び京都が文化中心となり、「町衆」の力を背景とする北山・東山文化が花開くこととなった[9]。

京都の風物詩として定着している“白川女”・“大原女”・“桂女”などの行商人は、近郊地域と都との日常生活上の結合を示し、近年ではその数も減少し消滅したものもあるが、花卉や野菜などを独特のいでたちで売り歩く姿も“京都らしさ”を演出するのに欠かせない。

衣食住に関しては、“京の着倒れ”に代表されるように、西陣織や京友禅が生み出され、現在でも京都の主要産業として位置づけられ、製品の一部は土産物として欠かすことができない。また、“茶漬け”に代表される食生活の習慣は海から隔たる内陸性の気候や京野菜の生産の発達を促し、“しば漬”・“すぐき”・“千枚漬”・“菜の花漬”などを生み出した。これもまた、京土産として重要な役割を果たしている。もちろん、陶器として清水焼が生まれたことも京都人の生活と密接な関連をもつものといえよう。

建築様式も京都の風情をかもし出す重要な要素の一つである。各時代・宗派を異にする数多くの仏教などに代表される宗教建築物を始めとして、伝統的な町屋の姿にその景観を思い起こすことができる。さらに、明治以降の近代建築も古都京都のイメージとは離れるものの、近代京都の雰囲気を生み出す大切な役割を担っている。それは、明治の建築家の一人である辰野金吾によってもたらされた西欧の建築様式に代表され、旧日本銀行京都支店（現・京都文化博物館）や、第一勧業銀行京都支店などであり、その後、次々に西欧建築が大学の校舎などにも取り入れられ京都の景観形成に深く関わりあっていくのである[10]。

京都をシンボライズする建築物として欠かすことの出来ないものに“夕日に映える東寺”と“京都タワー”があげられよう。とくに、賛否両論の中で昭和39年に建設された京都駅前の灯明台をかたどった京都タワーは今では京都のランドマークになった観すらある。

d．宗教

京都の歴史的観光要素として神社・仏閣を欠かすことはできない。信仰の対象であり、場となる神社・仏閣は日常的な参詣や参拝が行なわれることで人々と密接な関係が結ばれ

ている。たとえば、江戸時代では京都から遠方に住む人々にとって“本山参り”は“お伊勢参り”などとならび信仰と観光とが入り交じったイベントであったことは容易に想像できる。先の「都の魁（さきがけ）」において、六角堂前の茂知屋惣左エ門は「神風講社・崇敬講社・眞誠講」を、烏丸五条下ル町の森ゑいは「東山参詣」を、七条通烏丸西入町の樋口津□門は「両本山参詣定宿」をそれぞれ、旅館の看板に掲げている。したがって、門前町や宿坊なども神社・仏閣と相まって“京都らしさ”を構成する一景観となろう。とくに、東本願寺の門前町には本山出入りの業者の店や旅館が多く立地している。また、本山参りの人々の宿泊所として、諸国詰所組合に加盟する“詰所”が15軒ある。本山参りを行なう人々の土産物として数珠を始めとする仏具が重宝されたことにより、製造・販売を行なう店も門前町に集中している。

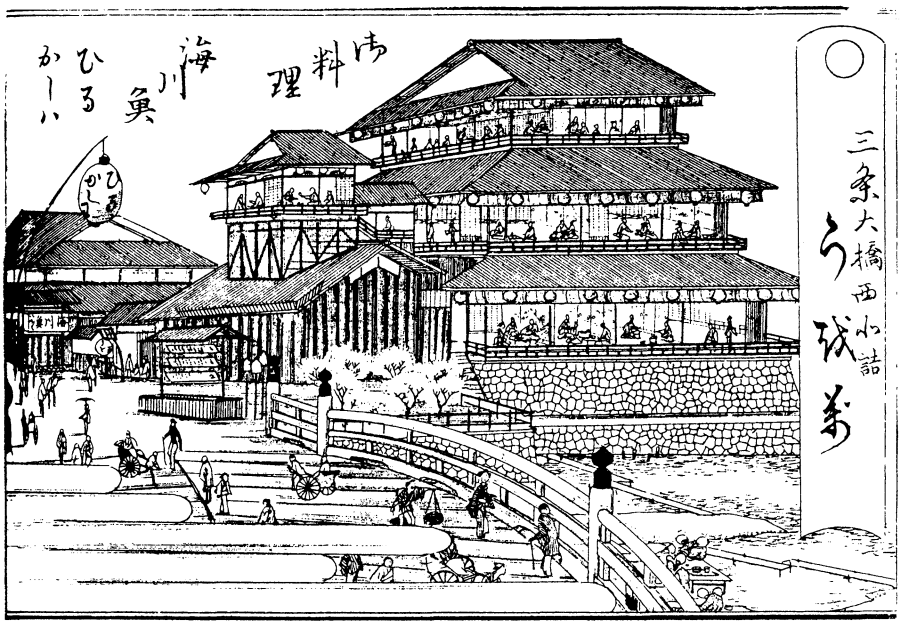
神社の境内では“厄除け”としての土産や今宮神社の“あぶり餅”などの菓子の販売が行なわれ、“京菓子”として位置づけられるものも生まれた。また、定期的に東寺の“弘法さん”、北野天満宮の“天神さん”、“六道まいり”といった“縁日市”が開かれ、観光要素の一つとして定着していくことになった。もちろん、神事や仏事が七夕会、祇園会、大文字、地蔵盆として年中行事として取り行なわれたことも、その後の京都観光の重要な資源となった。とくに、毎年8月16日に取り行なわれる“大文字五山の送り火”は精霊の送り火としての宗教的意味に加えて、夏の風物誌の一つとして位置づけられる。

e．娯楽・慰安

江戸時代には東海道五十三次などの街道の整備等によって旅行ブームが起こった。とくに、“京見物”は弥次喜多道中記や安藤広重によっても描かれているように、人々のあこがれとなり、三条大橋や三条通りを中心に旅宿や料理屋が数多く立地した。「都の魁（さきがけ）」によると、《料理商の部》として木屋町・麩屋町・先斗町・祇園・上京第廿弐組三本木・三条大橋西小詰・四条鐵橋西詰・四条小橋西詰・五条橋西詰・新京極（六角・四条上ル・蛸薬師下ル）・寺町五条上ルなどに多く、メニューとして、かしわ・まぶし・うなぎ、鯉ふな・茶わんむし・巻玉子・うまき・すき焼などが提供されていることが読み取れる。とくに、清流に恵まれた鴨川や高瀬川の二条から四条にかけての一帯では鯉・鮒・鰻などの川魚を生州に飼い客に供する“生洲料理”が繁盛した。したがって、いかにも庶民的な旅館や料理屋として機能していたことが窺い知れる。江戸期には四条河原が納涼の人々で賑わい、祇園会の季節を中心に水茶屋の床が並び、後の“鴨川の床”として定着していった。

また、四条河原一帯には“かぶき・浄瑠璃・見世物小屋”などが集まり、京都の風物詩として位置づけられる南座の“顔見世”もこの時代から始まり、娯楽的な要素が付加される時代でもあった。さらに、遊里（遊廓）も形成され、「祇園新地」・「島原」・「先斗町」・「宮川町」・「七條新町」・「上七軒」・「五番町」などに代表されている。

いわゆる“おのぼりさん”の増加は、地方の農村経済の繁栄から旅に出かけるゆとりが生じ、本山参りなどの大義名分を背景に開放感を得ることができたのである。天下太平の所以である。それに呼応するかのように、受



第2図　鴨川の風情
（『新撰　京都叢書第6巻　所収「都の魁」』より）

け入れ施設の充実や“旅行記”、“案内書”が次々に出版されていった。

f．京土産（菓子類）の由来

いわゆる“京見物”や“本山参り”などの人々が諸国から京都へ集まるなかで、必然的に京土産が誕生していくことになる。その中で、菓子類の由来をまとめると、次のようになる。

①禁裏（皇居・御所）への献上品に由来するもの
②寺社の境内の茶店などにおいて参拝者に供されたもの
③寺社の疫病よけとして庶民に授与されたもの
④製品の改良（羊羹の缶詰化・練羊羹）が販路拡大に結びついたもの
⑤腐敗しにくさが重宝されるもの
⑥名所だが名物がなかったことからつくりだされたもの
⑦行事等をきっかけに製造されたもの
⑧新たに生み出されたもの

これらがすべて、現在まで引き継がれ土産物として定着しているとはいえないが、一口に京菓子といっても、多種多様なものが様々な過程の中で生み出され、あるものは消滅するなど幾多の変遷を経て現在に至っている。その中から、京土産として定着していくものが数多くあった。京都市観光調査年報（平成元年）によると[11]、観光客は“生八ツ橋”・“八ツ橋”・“餅類”・“饅頭”・“五色豆”・“おこし・せんべい”・“羊羹類”・“そばぼうろ”・“ういろ”といった順に買い上げている。おなじみの品目名が並び、伝統の深さを感じとることができる。

第1表　近代以前における“京都らしさ”の形成要素

[自然景観（風土）]

“山紫水明処”…比叡山、東山三十六峰、鴨川、加茂川、保津川、桂川
平安時代…王朝文化：“池泉の都”、“遊楽の池”、“庭園”→園遊

[政治・経済]

古代…条坊制→右京・左京
人や物資の集散・結節点→市・問屋・同業者町・高瀬川←舟運
伝統産業の成立→西陣織・清水焼・京扇子・京友禅

[宗教]

厄除け、土産：菓子等→京菓子
↑
神社・仏閣←参詣・参拝→“縁日市”
（信仰の場）　（日常的）　“弘法さん”、“天神さん”、“六道まいり”
↓
神事・仏事…七夕会、祇園会、大文字、地蔵盆→年中行事
本山←参詣・参拝
（非日常的・広域的）→門前町・宿坊
（文化の形成）
“禅（鎌倉時代）”…華道（池坊）
↓　　茶道
懐石料理・普茶料理→京料理
“美術・工芸・芸能”

[風俗・習慣]

行商（近郊地域と都との結合）…“白川女”、“大原女”、“桂女”
〔衣〕“京の着倒れ”↔西陣織、京友禅
〔食〕“茶漬け”↔京野菜
↖清水焼
〔住〕“うなぎの寝床”、“べんがら格子”→町並み景観

[娯楽・慰安]

江戸時代…芝居→“顔見世（見世物小屋）”
遊里（遊廓）の形成
“京見物のブーム”：東海道五十三次…三条大橋→旅宿・料理屋・“鴨川の床”

Ⅲ．近代化に伴う京都の観光

江戸から明治へと時代が移り、京都も他の都市と同様に文明開化の波にもまれることになる。京都の観光事情もこれまでの諸要素をふまえながら大きく変化していくことになった。

a．明治・大正期

まず、空間的構造変化が認められる。外的には近代交通機関の発達・整備が挙げられる。鉄道は東海道線の京都・大阪間が明治9年に仮営業を開始し、京都・大津間は稲荷・山科盆地経由が同13年に開業した。その結果、京都観光の出入点が従来の東海道の終着点である三条大橋周辺から京都駅へと移行していくことになり、旅館等も駅前に数多く集積することになった。ちなみに、三条大橋から西の三条通高倉周辺は京の中心地として問屋や旅

籠が立ち並び、明治期には公共の建築物や銀行・商店などの洋風建築物が建てられたが、大正以降は拡幅された四条通や烏丸通にその比重を移していくことになる。また、市電が明治28年に開通し次々に路線を延長した。その後、現在の京阪電鉄・阪急電鉄・京福電鉄などの前身が路線を持った。このような近代交通機関の発達が京都の結節性を高め、内的な観光地へのアクセスが計られることになった。

西欧文化の波及は近代的ホテルの建設に現れ、河原町御池に「京都ホテル」の前身である「常盤ホテル」が開業し、明治32年には「都ホテル」が開業している。「大京都誌（1932年）東亜通信社」によると、「（要約）両ホテルは鉄筋コンクリート造りで、各部屋毎に手洗いは勿論風呂まで備え、西洋人のみならず、日本人にも非常に歓迎されている。」と紹介されている。京都観光の宿泊拠点として近代的なホテルがその一要素として加わったことが示されている。

また、槙村知事によって都市基盤整備が行なわれた。四条通りや烏丸通りの拡幅はもとより、新京極が成立したことは京都の観光要素形成に大きな意味があった。すなわち、明治5年ごろ、新京極は寺町通の東側、三条と四条の間に、荒廃しつつあった旧寺領を没収して盛り場として開設された。寺町の古名、東の京極にちなんで新京極と名付けられ、遷都と廃仏棄釈によって打撃を受けた市民生活復興の大きな一助となった。それは、芝居や寄席、覗きからくりや映画といった庶民の娯楽を提供するとともに、観光客にも慰安の場となったことは想像に堅くない。

明治期を特徴づける京都のイベントは数回に及ぶ“勧業博覧会”の開催であった。東京遷都後の京都は積極的な都市の活性化を様々な諸事業の遂行で果たそうとする。一例として“琵琶湖疎水・インクライン・発電所”の建設により、市電を走らせたことであるが、産業の発展にも力を注いだ。明治6年に開かれた第2回の京都博覧会には内外から40万人にものぼる人々を集めたことは注目に値する。その後の京都観光にイベントの要素が付加されることにもつながった。

そのころ、都市公園の整備も積極的に行なわれ、勧業博覧会の開催された岡崎周辺や円山公園などがその例となった。なお、植物園は大正13年にわが国で最初に開園した本格的な公立植物園であり、市民・観光客の憩いの場となっている。

また、京都三大祭りの一つとして名高い時代祭が明治28年の平安神宮創建の際にその記念行事の一環として始められた。平安時代から明治維新期の風俗や文物を行列によって表現し、数多くの観光客を集めている。

b．昭和期

昭和に入ると昭和5年5月に市の観光課が設置され、行政サイドからも京都観光への積極的な関与がはかられている。興味深いことはモータリゼーションへの対応が念頭におかれており、昭和7年の『大京都誌』[12] によると、①東山遊覧道路（三条蹴上～将軍塚方面）、②大文字遊覧道路（京津国道山科駅前～白川）、③叡山遊覧道路（白川道重石～敦賀街道）、④三尾遊覧道路（洛西嵯峨大覚寺前～周山街道）などの遊覧ドライブウェイの計画が立案されている。これらは、自動車利用を意識した景色・眺望への対応であり、それらの遊覧道路が具体化し、完成するのは昭和30

年代から40年代にかけてではあるが、観光スタイルの変化・多様化を裏付けるものである。また、遊覧バスの運行も始まり、具体的には、京都駅・三条大橋東詰から南は伏見から東は銀閣寺までの一帯と、西は島原・北野・金閣寺までを七時間前後で案内するルートが採用され、案内婦人（現在のバスガイド）乗車のもとに、食事は指定食堂でといった形式が取り入れられている。さらに、嵐山遊覧船株式会社の経営で、亀岡から嵐山に至る“保津川下り”も始められている。

このように、昭和の初期に現在の京都観光のプロトタイプが成立しており、従来の観光対象に加え、新たな施設（博物館・美術館）などにも関心が向けられた。

利用交通機関も多様化し、市電、市営自動車、路面電車、ケーブル・空中ケーブル、地下鉄（京阪電車新京都線）などが観光発展に大きく寄与した。もちろん、第二次世界大戦の前後は京都といえども観光の衰退化が著しく、数多くの行事や催し物が取りやめとなった。

昭和30年代から昭和40年代に入ると、観光道路の開通が相次ぎ、比叡山ドライブウェイ（昭和33年）（田ノ谷峠～四明ケ岳）、東山ドライブウェイ（同34年）（蹴上～九条山）、嵐山・高雄パークウェイ（同40年）、奥比叡ドライブウェイ（同41年）（山頂～大津市仰木）開通などに代表される。これらにより、自動車のドライブによる広範囲かつ景色（眺望）を楽しむ観光の要素が付加された。ただ、モータリゼーションの進行に伴い急増する自家用車観光に対して市民生活へのディメリットを調整する目的で、昭和48年に“マイカー観光拒否宣言”が出された。

他方、昭和39年には急増する外国人観光客のために、ツーリスト・インフォメーション・センター京都が開設され国際化に対応していくことになった。

昭和40年代以降になると、従来の観光資源に加えて新たな観光施設が付加された。まず、昭和47年に旧国鉄が鉄道百年を記念して“梅小路蒸気機関車館”を開館し、同50年には“東映太秦映画村”が開村し、同51年には京都市伝統産業会館が開館した。なお、同55年には京都駅前地下街“ポルタ”が開業し、観光客の利便性を高めることとなった。京都駅南口も再開発によって大きく変貌し、同59年には再開発ビル“アバンティ”が開業した。同63年には旧平安博物館が“京都府京都文化博物館”として装いを新たにし、平成元年には“琵琶湖疎水記念館”が竣工するなどした。交通体系の整備も著しく、同56年に京都市営地下鉄（京都駅～北大路）が開通した。その後、同62年に京阪電車の地下化（東福寺～三条）や平成2年の鴨東線（三条～出町柳）と相次いだ。

行政面からみると、先の昭和5年の観光課設置についで、第二次世界大戦に伴う京都観光の衰退を経て、同22年に京都市の観光課が復活し、同年に祇園祭の山鉾巡行が復活するなど戦後の荒廃から観光面での明るい兆しがあらわれつつあった。昭和25年には国策として京都国際文化観光都市建設法が制定され、国内・国外にむけて積極的な取り組みがなされていった。ただ、同31年に京都市が財政再建団体に指定されるなど必ずしも財政的に恵まれていたとはいえない。そこで、昭和31年10月から同39年4月まで文化観光税が実施され、その後５年間文化保護特別税と名称を変

更し延長した。それらの税収によって観光道路の建設や駐車場の整備が行なわれた。とくに、岡崎の京都会館の建設は京都の文化発展に大きく寄与した。また、京都市は昭和46年10月に市街地の景観を乱開発から保護するために、市街地景観条例を制定し、同50年の文化財保護法の改正に伴って重要伝統的建造物群保存地区として、同51年に清水産寧坂と祇園新橋、同54年に嵯峨鳥居本を指定した。さらに、自然景観の保全をねらいとして、従来の風致地区に加えて昭和45年に京都市風致地区条例を制定し範囲を拡大している。

なお、第二次大戦後、修学旅行が盛んになるにつれて、修学旅行生を対象とする旅館や土産物店が増加していくこともこの時代の特徴の一つである。小・中・高校の修学旅行先は昭和63年の統計（日本修学旅行協会）によると見学地・宿泊先ともに第一位を京都が占めている。しかしながら、近年は生徒数の減少や旅行形態の多様化に伴い減少傾向にある。

ちなみに、京都市に所在する国指定の文化財は、国宝が全国の約20％、重要文化財が同

第2表　近代以降における観光形成要素

[文明開化]
西欧文化の波及→ホテル・レストラン・洋風建築物

[イベント]
勧業博覧会・時代祭り（平安遷都千百年記念）
修学旅行

[交通機関の発達・整備]
鉄道網の発達→観光客出入点の変化（三条大橋→京都駅）
ドライブウェイ・ケーブル等の建設・都市内交通網の充実
遊覧バスの運行

[都市基盤の整備]
主要道路の拡幅（四条・烏丸通）
新京極の成立→娯楽・慰安の場
都市公園の整備…岡崎・円山公園・植物園

[観光行政]
観光課の設置（市）
法整備…京都国際文化観光都市建設法（1950年）
文化観光税の実施（1956年）
京都市風致地区条例（1970年）
市街地景観条例（1971年）

[国際化]
ツーリスト・インフォメーションの設置
国立京都国際会館（1966年）

[新観光資源]
文化・観光施設の付加…レジャー施設・博物館・美術館

[マスコミ]
各種マスメディアによる情報提供→イメージ・アップ

第3表　観光・娯楽関連の年表（明治以降）

年	月/日	
明治4	10	京都の有力商人を中心に博覧会の開催。同年11月に京都博覧会社の創立。
明治5	3/10	勧業博覧会（本願寺、建仁寺、知恩院などを会場とした）の開催。
		→総入場者数32,000人。
		→「みやこ（都）踊り」が創始（70日間興業）。
		《新京極の成立》
		明治5年ごろ、京都府参事槙村正直の発案で、寺町通の東側、三条と四条の間に、荒廃しつつあった旧寺領を没収して開設された盛り場。寺町の古名、東の京極にちなんで新京極と名付けられ、遷都と廃仏棄釈によって打撃を受けた市民生活復興の大きな一助となった。
明治6	3/13	第2回京都博覧会（入場者総数40万人）。
		→明治29年まで毎年開催（御所）が会場となる。
明治18	5/15	粟田口から日岡にかけて簡易宿泊所多し。
明治19	12/25	円山公園開設。
		→当初は人工鉱泉療養所や貸席・旅館などが並んでいたが、数度の火災で消失。
		←大正年間、小川治兵衛によって造園。
明治21	11	河原町御池に「常盤ホテル」開業。
明治28	3/3	井上喜太郎が前田又吉より「常盤ホテル」を買取り、「京都ホテル」として開業。
明治28	4/1～7/31	第41回内国勧業博覧会（岡崎）（入場者総数113万人）。
明治28	10/22	平安遷都千百年記念祭。
		（第1回時代祭）
明治30	5/1	京都博覧会館→平安神宮東南に竣工。
		京都国立博物館開館。
明治32	8/2	「都ホテル」の開業。
明治34	6/6	新京極の常盤座消失。隣の弁天座も類焼。
明治35	1/1	大谷松次郎・竹次郎兄弟により常盤座改め、明治座の開場。
明治36	4/1	京都市動物園開園。
明治37	6/1	京都駅で旅客弁当立ち売り開始。
明治40	5/16	島原競馬場で第1回京都競馬の開催。
明治44	4/29	新京極の京都座新築開業式が行なわれる。
大正1	4/1	「大仏ホテル」の開業。
大正2	8/1	市電・京阪・京津・嵐電の連絡乗車券が発売。
大正12	11/10	大典（即位）記念京都植物園開園。
大正13	3/20	東宮成婚奉祝・万博参加50年記念博覧会（総入場者数約100万人）。
昭和2	1/31	先斗町歌舞練場竣工。
昭和2	11/11	市立円山音楽堂竣工。
昭和3	9/20	大礼記念京都博覧会開会（総入場者数300万人余）。
昭和5	5/22	市に観光課設置。
昭和6	3/3	京都駅前に観光案内所の設置。
昭和8		京都市美術館開館。
昭和12	7/10	「叡山ホテル」竣工。
昭和22		市の観光課復活（戦争による中断）、嵐山もみじ祭り誕生。
昭和25		京都国際文化観光都市建設法の制定。
昭和27		北野をどり初演。
昭和28		祇園をどり登場。
昭和33	4/18	比叡山ドライブウェイ開通（田ノ谷峠～四明ヶ岳）。
昭和34	5/1	東山ドライブウェイ開通（蹴上～九条山）。
昭和36	12	社団法人京都市観光協会設立。
昭和39	12	京都タワー建設。
昭和39	3	ツーリスト・インフォメーション・センター京都案内所開設。
昭和39	3	伏見桃山城落成。
昭和40	11	嵐山・高雄パークウェイ開通。
昭和41	4	奥比叡ドライブウェイ開通（山頂～大津市仰木）。
昭和41	5	国立京都国際会館開館。
昭和44	12	財団法人京都市文化観光資源保護財団設立。
昭和47	10	梅小路蒸気機関車館開館。
昭和50	11	東映太秦映画村開村。
昭和51	11	京都伝統産業館開館。
昭和56	5	市営地下鉄開通（京都駅～北大路）。
昭和63	10	京都文化博物館開館。
平成元	6	琵琶湖疎水記念館開館。

佐和隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか『京都大事典』、淡交社、1983
㈳京都市観光協会「京都観光30年の歩み」、1991
その他による

15%を占め、質・量ともに全国一である。

また、マスメディアが京都のイメージを増幅させていることも見逃すことができない。数多く出版される京都関係の雑誌や旅行案内書がそれらを裏付けている。たとえば、“京都の原宿”などといわれる北山通や白川通は斬新なデザインの建築物を基盤に新たな京都のイメージを創出している。さらに、京都が数多くの小説や映画の舞台となったことも観光客に大きなインパクトを与えているものと言えよう。

Ⅳ．観光都市京都の現状と課題

このように、観光対象としての京都は“京都らしさ”を現出する要素として、自然景観（風土）、政治・経済、文化（風俗・習慣）、宗教、娯楽・慰安などの諸要素が歴史的なクロスセクションの上に展開し統合されていることが明らかとなった。それは京都は京都でしかありえない様々な要素から構成されてきたものであり、今後、さらなる“京都らしさ”が付加されていくのであろう。

最後に現在の京都の観光がいかなる状況にあるのかをみておきたい。京都市にとって観光は重要な経済基盤の一つである。平成元年の第三次京都観光基本調査[13]によると、京都市商工業全体に対して観光産業がもたらす経済効果は売上高で約14%を占め、内訳として、宿泊（22.2%）、料理・飲食（同21.5）、みやげ（同21.2）、交通（同14.4）、商店街・百貨店（同14.3）などとなっている。事業所数で京都市全体の21.0%、従業者数で16.7%と重要な産業として機能しているものと考えられる。ちなみに、観光依存率の高いものはみやげ（64.6%）、宿泊（同61.4）、文化施設（同58.8）といった順となり、これらは単に観光産業のみならず他産業への大きな波及効果をもたらすものであり、基幹産業の一つとしての観光を数値の上からも知ることができる。

ちなみに、平成元年の観光客数は3,862万人であり[14]、日本人の約3.2人に1人が京都を訪れていることになる[15]。

以上のように、京都の観光は自然や政治・経済・文化の諸要素が歴史的重層性の中で相互に関連し、京都はわが国を代表する観光地としてその名を国内外にはせている。“日本人の心の故郷”という言葉が、さほどおおげさに聞こえないのもその懐の大きさ故なのであろう。

そもそも、観光・娯楽とは人間生活の日常性からの脱却すなわち、非日常性の追求にほかならない。それは人間の五感を満足させることが必然であり、京都は見事にそれに答え得る都市である。すなわち、盆地という、ややもすると閉鎖的で箱庭のような広がりが“山紫水明”のコンパクトな空間をもたらし、移動にさいしての距離や時間にさほどの苦労を強いず、方格状の道路が“姉三六角蛸錦……”と人々に位置の確認を容易にし、盛りだくさんの自然や風土や歴史的文化的遺産が人々の視覚を満足させる。“京料理”は味覚・視覚を芸術的に満たしてくれるし、帰途には、多種・多様な土産物が旅の思い出づくりに一役買ってくれる。

観光都市“京都”はその歴史的必然性から逃れることはできないし、逃れる必要もないであろう。しかし、京都に限らず歴史都市の抱える問題は現代都市として機能する際の数

多くのミスマッチにある。“環境保全と経済・都市発展”・“歴史的景観保存と住民”・“市民生活と観光”等々である。

こうした二律背反的な課題が今後も現代都市京都の抱える問題として表面化することは想像に堅くない。まして、国際化が進む京都ともなれば問題はさらに複雑化するであろう。“京都らしさ”の原点に帰れば、最低限“山紫水明”は守らなければならない要素に思える。

1994年に建都1200年を迎える京都がそのスローガンとして掲げる“歴史と創生”はまさに京都の観光が今後歩む道しるべとしても選択せざるをえないものとなろう。

〔付記〕本稿は1987年よりその活動を行なってきた「京都地理研究会」の議論の中から多くの示唆を受けたものであり、記して会員各位の皆様に御礼申し上げます。

注

1) 浅香幸雄・山村順次編『観光地理学』、大明堂、1974、1頁。
2) 林屋辰三郎『京都』、岩波書店、1962、7～9頁。
3) ㈳京都市観光協会『京都観光30年の歩み』、同協会、1991、140頁。
4) 京都叢書刊行会編『新撰 京都叢書第8巻』、臨川書店、1987、323～366頁。『新撰 京都叢書』は元禄以降昭和期にかけて記された版本・活字本および写本の中から重要なものが取り上げられ復刻・刊行されたものであり、本巻10巻・古地図集1巻・索引1巻の全12巻から成り立っている。「京都土産（明治28年）」もそのうちの一つである。
5) 京都叢書刊行会編『新撰 京都叢書第6巻』、臨川書店、1985、118～161頁。「都の魁（さきがけ）」は『新撰 京都叢書』に所収されたものであり、明治16年に石田有年が銅版で彫刻編輯し、実弟の石田才次郎（旭山）が印刷出版したものである。
6) 京都新聞社編『京都 いのちの水』、京都新聞社、1973、56～83頁。
7) 全国京都会議監修『小京都を訪ねる旅』、講談社、1991、140～141頁。
8) 前掲2)、150～151頁。
9) 前掲2)、154頁。
10) 京都建築倶楽部編『モダンシティーKYOTO』、淡交社、1989、20～48頁。
11) 前掲3)、156頁。
12) 東亜通信社編『大京都誌』、東亜通信社、1932、593～594頁。
13) 京都市観光協会『京都の産業のあらまし—第3次京都観光基本調査から—』、同協会、1989、3頁。
14) 前掲3)、18頁。
15) 前掲3)、144頁。外国人客は平成元年に37.9万人で訪日外国人283.5万人の13.4%が京都を訪れている。

参考文献

佐和隆研・奈良本辰也・吉田光邦ほか『京都 大事典』、淡交社、1983、495頁。
京都市編『京都の歴史 第8巻 古都の近代』、京都市、1975、569頁。
京都新聞社編『新 都の魁』、京都新聞社、1989、303頁。
京都文化博物館編『気球があがった—近代京都の一世紀』、京都文化博物館、1988、169頁。
京都歴史教育者協議会編『わたしたちの京都—歴史をたずねて』、地歴社、1981、169頁。
淡交社編集局編『京のみやげもん』、淡交社、1989、66頁。
奈良本辰也ほか『京都百話』、角川選書、1984、291頁。
林　義雄『京の野菜記』、ナカニシヤ出版、1975、174頁。
林家辰三郎『京都文化の座標』、人文書院、1985、238頁。
宮田　輝編『小京都100選』、秋田書店、1975、272頁。